聖なる夜は君と二人で・・・・・

白雨　神威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖なる夜は君と二人で・・・・・

【Ｎコード】
Ｎ３５５２Ｐ

【作者名】
白雨　神威

【あらすじ】
少しドジっこな多田友夜。
そして、人とコミュニケーションをとる事を拒んできた中島海兎。
この二人の出会いは、意外なものだった・・・・・・
海兎の正体を知らされた友夜は、いったいどうなってしまうのか！？

第一章　出会い（前書き）

またまた、ＢＬ小説を・・・・・
どうせまともな作品に仕上がるわけではないので
暇な時にでも読んでくださいませ┐〇ペコ

第一章　出会い

吸血鬼は、すでに滅んでいる。
そう思っているのは、僕だけじゃないはずだ。
でも、この状態を見てもそういえるだろうか？
目が鮮血のように真っ赤で、犬歯は鋭く、耳はにんげ離れしている
としか言いようがないほど尖っている。
これだけならまだ吸血鬼と断定する事はできない、が。
僕の上におおい被さり、首の根元に犬歯を突きたて血を吸っている
この光景を見ても、人間だと言えるのだろうか・・・・？

「おい、多田ぁ俺のそのバック取って～」
「あ、うん分かったぁちょっと待ってねぇ～。よいしょっと。いく
よぉ～。そぉれ」

「サンキュー」
僕は多田（ただ）友夜（ともや）。一応サッカー部に入っている高校1年生です！

「多田、俺にも取って、その黒いスポーツバック」
「分かった～いくよぉ、とおぉ！」

綺麗に弧を描いて落ちたそこには・・・・・・・人が座って本を
読んでいた。

「あ！！危ないです！！！」
言っても遅かった。スポーツバックは本を読んでいる人の上に落ち
ていた。

「多田、何してんだよ～。気をつけろよ～」
そう言って、同級生はスポーツバックを持って教室を出て行く。
とりあえず、この人気を失ってるみたいだから、保健室に連れて行こうかな。
よいしょっと。あれ？結構軽いなぁ～

「先生～。ちょっと用事があって来たんですけ・・・・ど・・・・・？誰も居ないのかぁ・・・・どうしよう。とりあえずベットに寝かせておこう。」

うわぁ～綺麗な顔立ちしてますねぇ～まつげ長～い。むむ？耳にピアス？校則違反ですよぉピアスなんて・・・・。でも、僕この人と同じクラスなのに名前とか知らないんだよなぁ・・・
など思いながら観察して居ると、目が合った。とっても綺麗な赤い瞳だった。
僕はつい
「綺麗な瞳・・・・・・・・・」
と言ってしまった。
そのことばを聞いた時、彼は驚いて鏡を見た。
「コンタクトが外れたのか・・・・・・・」
そういうと俺を睨み付け
「お前どうしてくれる。こんな目だとバレたら面倒くさいだろ！コンタクト探すの手伝えよな」

どうして、こんな綺麗な目を隠す必要があるんだろう・・・・・・
綺麗なのにもったいない・・・・

「別に隠さなくてもいいんじゃないのかな？僕その目好きだよ。でも、怒らせちゃったなら、ゴメン。僕何でもするからさ。なんでも言ってよ。えぇっと、僕は多田友夜。君は？」

「俺は中島（なかじま）　海兎（うみと）だ。お前今なんでもするから何でも言えって言ったよな。」

「う、うん言ったけど・・・・・・どうかしたの？」

この人と話してると変な世界に吸い込まれてしまいそうだ・・・・・・・・・

「お前今日空いてるか？空いてるなら7時に西公園に来い！俺の家に招待してやる」

おぉ！友達家に行くなんて久しぶりだなぁ～どんな家なんだろうなぁ～楽しみ～

「分かった！じゃあ7時ね！約束だよ！あ、僕部活に行かないと・・・・じゃあね海兎君！！」

ガラガラガラ

「ふん・・・・・良い食料を見つけたな・・・・・」

第一章　出会い（後書き）

ハイｗｗｗここですでに受け攻めは決まっておりますｗ
皆さんも分かると思いますｗｗｗ
私の思考は単純だからねｗｗｗｗ
そんな単純んな小説をよんでくださって居る方々。お疲れ様でした。
次の作品をお待ちください┐〇ペコでわでわ、また次の章（？）で
！！

第二章　招待（前書き）

お久しぶりです┐◯ペコ
いやぁ～色々あったものですから
いや・・・ただたんにに寒かっただけなんですけどｗｗ
と、とりあえず！！
また、続きを書かせていただいたのですが・・・
前の作品にもあったように多分今回も護持脱衣ｚがあると思いますが…
訂正はしません！！！誤字脱字も個性だと私は思ってます！！！
なので、そんな誤字脱字ばっかりの私ですが、暖かいめで、もし誤字脱字があったら「あぁ、またミスってるよｗｗ」みたいな感じで流してください！！では、第二章をどうぞ！！

第二章　招待

さぁ～て、なにを持って行こうかなぁ～
さっき電話があって「何も持ってこなくて良い」って言ってたけど…
一応遅くなりそうになったら親に電話しないといけないから携帯を持って行こうかな～
では、レッツゴーです！！

う～ん…そろそろ7時ですね～
まだ来ないんでしょうか…

僕は公園の生垣のコンクリートの上に腰をかけて海兎(うみと)君を待っていた。
そして、不意に後ろから肩を叩かれた
「おう、遅くなったなぁ。ワリィ」

海兎君だった

「いえいえ、そんなに待ってないですよ～僕さっき来たばっかりです！」

「そうか、じゃあ行くか」
そしてコンクリートから飛び降りたその時

ドサッ

そのまま着地できず落ちてしまった……

「痛てててて」

それを見ていた海兎が
「ップ…マジおもしれぇわ！！ナイス！やっぱりお前サイコーだよ！！」

「…？僕何か面白いことでもしましたか？」

「うわっ！お前大丈夫か！？足から血がダラダラだぞ…。病院行かなくて大丈夫か？」
あらら…また足を擦りむいてしまった……。それにしても海兎君笑った顔もだけど、困った顔も可愛いなぁ～。というより綺麗だなぁ……

「オ～イ！本当に大丈夫なのか？血が止まらねぇぞ！」
「あぁ、大丈夫ですよぉ。いつものことですから。」
僕がそういうと
「お前、体の血が足りなくなるぞ…。と、とりあえず早く俺ん家行こうぜ。止血とかするから。」
そんな、止血なんてしなくても大丈夫なのに…心配性なんでしょうか
「お前歩けるか？おんぶしてやろうか？」
「フフフ。大丈夫ですよぉ～。さては海兎君心配性ですねぇ～」
僕がそういうと、少し拗ねたように顔を逸らし
「バカ！そんなんじゃねぇし…ほらさっさと行くぞ！！」

「……これが海兎君の家ですか？」
「そうだけど、どうかしたか？」
「いえ…これ本当に家ですか？何かのイベント会場とかじゃないで

すよね？」
海兎君の家は「西洋のお城かい！！」と突っ込みたくなるような大きさの家でした。

「そんなふざけたこと言ってないで早く家の中に入るぞ」
そう言って、２，３メートルはある門を開けた
すると、そこにはバスのような大きな車が止まっていた。
「なんでこんなところに車？」
「あぁ、だってここから家まで歩いて行ったら１時間は掛かるぞ。だから車で行かないとなぁ。
さすがに１時間も歩きたくねぇだろ？」

１時間…１時間もあったらサッカーの練習どのくらいできるかなぁ～走りこみ…パス練習…結構練習できますよねぇ～

「ほらボケっとしてねぇで、さっさと乗れ！ったく…お前ボーッっとしすぎだ！」
「あぁスイマセン…。小さい頃からこんな性格なもので。」

かれこれ３０分近く車に揺られやっと海兎君の家（母屋？）に着いた。

「近くで見ると…スゴイ威圧感ですねぇ…」

「ハイハイ、感想は後で聞くから早く入れ！玄関の前で立ち止まるな！寒ぃんだよ！」

「あ、すいませぇん」

中に入ると…床一面レットカーペットというのでしょうか？とにか

く真っ赤な床が広がっていました
「あ、靴は脱げよ。いくら見た目が洋風っぽいからって靴は脱がねぇと床が汚れるからな」

「はぁい。分かりました…あの、変な事を聞くかもしれませんがこのお家って何部屋くらいあるんですか？」

「部屋の数か…数えたことねぇからよく分かんねぇけど、２０部屋以上だと思うぞ」
２、２０部屋ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？
そんな、僕の家の何倍でしょうか…えぇっと僕の家の部屋の数が、５部屋だから…
４倍…どんだけですかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

「どうした？なんか、頭から煙が上がってるぞ…」
「あ。す、すいません。ちょっと計算をしていたもので…」

「とりあえず、俺の部屋に行くぞ」
「え？あの、海兎君のお父さんとお母さんに挨拶をした方が…」
僕がそういうと、海兎君の顔が急に寂しそうになった
「いや、俺の親はもう居ないんだ…。二人ともちょっと事故でな…」
「そ、そうだったんですか…スイマセン僕余計な事を…」

僕が涙ぐむと
「いや！お前は何もしてないから！！俺が説明してなかったのが悪かったからさ…だから泣くな！」
「あ、あい…ありがどおございまず」

「んじゃあ、俺の部屋に行くか。お前の足の消毒もしねぇとな…」

しょ、消毒！？
僕消毒だけは消毒だけは嫌いなんですが…
「イヤ…あの…消毒だけは…できればぁ…やめませんか…？」
すると、海兎君の顔が険しくなって
「バカ！お前なぁ…ちゃんと消毒しねぇとヤバイことになるんだぞ！知ってるか？こんな話…
ある若者が学校でド派手にこけてしまった…しの若者は消毒が大っっっっっ嫌いだった…そして、そのまま消毒をせずに学園生活をすごしていた…そしたらある日足に激痛を感じた。
驚いて足を見てみると……
そこには、去年死んだおじいさんの顔が！！！！」
「イヤァァァァァァァァァァァァ！！！分かりましたぁぁ消毒しますぅぅぅ！！！」
「ったく、手のかかる奴だな…。」
「スイマセン…本当に消毒が嫌いだったので…」
「分かったから、泣くなよ！！じゃあそこのベットに座っとけ」
そういうと、海兎君は耳にしていたピアスを外した。
すると、髪の毛の色が黒から金に変わり、耳は尖り犬歯は鋭くなった。
「……？えぇっと…どちら様ですか…？」
僕が聞くと海兎君（？）は笑って
「バァカ！俺がよ俺！海兎だ！さすがお前おもしれぇわ！！」
…？でも僕の知ってる海兎君じゃないですよ。髪の毛金髪じゃないし、耳も尖って無いし…
それにあんなに犬歯が尖ってたら絶対口を怪我しますよ！

「さて、消毒するか」
そう言って、海兎君は僕の傷口を丁寧に舐め始めた。

第二章　招待（後書き）

ハイ！！いったんここでストップでぇすｗｗｗ
今回はすこし、会話が多いですかな？よく分かりませんがｗｗｗ
まぁ、この先は私の気分しだいで結構変わって行きますねぇ～
ですのでねぇ～
やっぱりこの先グダグダに…まぁ、気になさらず！！この先もどうぞ宜しくお願いします┐◯ペコ

第三章　（前書き）

お久しぶりです！！！！・・・か？ｗｗｗｗｗ
最近寒すぎます！！！今の私の部屋の温度・・・なんと８℃！！寒っっ！！
だから、こんなに手が動かないのか・・・・・・そうか・・・なるほどｗｗｗ
とにかく、えぇ～・・・前の章・・・・誤字脱字多すぎ！！！
この前書きのところですでに誤字が・・・・・・・・・｜￣｜○ガックリ・・・
も、もう気にしないもんｗｗｗｗとりあえず、お詫びします＞＜
本当にすいません！！
今度こそはちゃんとするんで！！！あ、でも文章能力がないのは仕様ですので・・・・ご勘弁おぉぉぉぉぉぉぉ。・（ノД`）・。・

第三章

「な、なな、ななな！！！」

僕はあわてて自称海兎君の頭を掴んだ。

「なにをしてるんですかぁ！！！！！」

「え？だから、消毒だって。痛くないだろ？多分。」

……そういう問題じゃないですよ。

「あの、消毒ってそういう行為では無いと思いますが……」

僕がそういうと、とぼけているように

「え？お前知らないのか？吸血鬼の唾液には、消毒・殺菌とかの効力があるんだぜ！！」

だからぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！そういう問題じゃないんですよぉぉぉぉぉ！！！！

「あの…まだ吸血鬼って言ってるんですか？もしあなたが本当に海兎君なら、吸血鬼じゃないはずなんですよ。または、あなたが本当に吸血鬼なら、海兎君ではありません。僕の言ってることが分かりますか？あなたの言ってることは矛盾してますよ。そりゃあ、確かに目の前で海兎くんがなんかよく分からない金髪の吸血鬼になって、少し頭の中が混乱してますけど…」

僕は、そこまで言って自称海兎君の様子を伺った。

すると、以外にも口角を上げて笑っている。

「な、何が面白いんですか！？」

僕が少し怒った風にいうと

「まず、お前のその海兎君の情報が間違ってるんだよ。だって、お前の知ってる海兎君は自分のことを人間だって言ったか？言って無いだろ。」

そんなことってありですか？そもそも普通の人だったら「自分は人間だ」なんて言いませんよぉ！！

そんなことを少し突っ込みながら、自称海兎君の方をじっと見ていると

「そ、そりゃあよぉ。ちゃんと説明してなかったのは悪いと思うけどよぉ、どうせ言っても信じねぇだろ？だから、見せた方が早いって思ってよ…。分かった！じゃあ今から俺、お前の知ってる海兎くんに戻るからな！！ちゃんと見ててくれよ！！！」

そう、大声で言うと耳にピアスをつけた。

その途端に、今まで金髪だった髪の毛が綺麗な黒に変わり、鋭く尖っていた耳や犬歯も戻っていった。

「どうだ？お前の知ってる海兎君か？」

目の前の男は言った。

確かに海兎君だった…。と言う事は、海兎君は吸血鬼？

僕が少し困っていると

「お前が考えている事は大体分かるよ。俺はお前の知ってる海兎君だ。でもその海兎君が吸血鬼だったのか……って事だろ？そうだ、

俺はそのことを話そうとしてお前よ家に呼んだのによ…お前が途中であんなコケ方で血ダラダラだしながらニコニコしてたらさ…つい本能的に…わりぃ。
でも、お前には後々教えようと思ってたんだ。俺の正体を…
俺ってさ、学校だとあんな無愛想なキャラだろ？だからさ、人に心配してもらった事がないんだ。だから俺みたいなのにも優しくしてくれるお前が気に入ったんだ！だからさ…また俺を一人にしないでくれ…。こんなことワガママだって分かってるけど…。でも…頼む！！！」

そういうと、海兎君の目に溜まっていた涙が零れ落ちた。

「あ、あれ？俺泣いてんの？アハハおかしいなぁ…俺泣いたこと無いんだぜ…」

それでも、次から次に涙が零れてくる。

そうか…確か海兎君は両親が事故で…
どんなに寂しかっただろう。どんなに心細かっただろう。
同じように両親が居ない僕なら分かるはずだ。
そう思ったら体が勝手に動いていた。

「え？」
海兎君が驚いたような声を出した。
僕は、海兎君を抱きしめていた。強く、息が苦しくなるほど…。

第三章　（後書き）

すいませぇぇぇん！！！なんか手が動かないので、今回は短いですがここで切らせていただきます！！！すみませぇぇん本当に！！！！！次こそ！次こそ部屋のストーブに灯油を入れてもらって暖かい部屋のなかで、続きを書くので、その時まで・・・

誤字脱字もきにせず！！！待っててください┐◯ペコ

第四章　孤独（前書き）

こんばんわ！！またはおはようございます！んでもって、こんにちわ！！
やっと４話まで行きましたねぇ・・・なんてこんなのんきなことを言っている場合では無いのです！！！なんと！！！第三章のサブタイトルを付け忘れてましたｗｗｗ
ホントすみません・・・
小説本文は多分良かったと思うんですけど…こんなところでミスをするなんて…
私のバカ野郎ぉぉぉぉぉぉ＞＜

第四章　孤独

小説本文　「ど、どうしたんだよ。友哉！ちょ、苦しいって！」
僕の腕の中で海兎君が一生懸命にもがいている。

「あ、スミマセン…」
僕としたことが…冷静な判断が出来てませんでしたね…ちょっと反省です。
でも、あの寂しそうな顔を見ていると僕まで苦しくなってしまったんですよ…

「実は…あの、僕も両親が居ないんですよ…。今はお父さんの弟夫婦と一緒に住んでいます。二人は子供を授かれなかったので、僕を本当の子供のように育ててくれました。でも、やっぱり、寂しいんですよ…。海兎君からしたら、『そばに居てくれる人が居てくれるだけで良いじゃねぇか。』って思うかもしれませんが、血が繋がってないからだと思うんですけど気まずい空気がよく流れるんです。きっと僕がいるせいだとか思ったりしました。なんで、僕だけ生き残ってしまったんだろう…とか。
このまま死んだら、僕もお父さんやお母さんのいるところにいけるかなぁなんて思ったこともありました。そんな時に、僕の同級生まぁあまり話をしたことは無かったんですけどその同級生が、何かと僕をイジってくるようになったんです。最初はウザイなぁとか思ったりして、今の海兎君みたいに回りに人を寄せ付けなかったんですけど、その同級生がまたしつこくて…でも、その同級生と話しているとなんか安心できたんです。
今、僕がこんな風になれたのもその同級生のおかげだと思っていま

す。
だから、『一人にするな』なんてそんなくだらない事を考えないで下さい。僕は、海兎君に避けられてもウザがられてもついていきますから…だから、その涙を拭いてください。」

僕が言い終えると、少し聞きづらそうに
「あのさ、その同級生はどうなったんだよ。」

…あまり言いたくないことだけど…でも、いつかは言わなければいけないことだし…。
「えぇ…その同級生は亡くなりました…。人では無い何かに殺されたそうです…」

僕がそのことを言うと、一時の間シーンとしていた。それを打ち破るように
「あ、ありがとよ…。お前！俺から感謝されるなんてそうそうねぇぞ！！良かったな！！
俺も変なことを気にしてたな…。なんでか分かんねぇけど、今日始めて会ったはずなのに…。俺お前とならこの先も仲良くやっていける気がするぜ。」

良かったです。いつもみたいに明るい海兎君に戻ってくれましたね…。
まだ、海兎君に話してない事もあるけど…これはまだ、もうちょっとお互いを分かり合えてから話さないといけないかな…。

「あ、海兎君。これは僕からの提案です！」
海兎君はもっと他の人と接触したいと考えているようだし、それをお手伝いできたら良いなと思って、僕はある提案を言った。

「海兎君、学校に行ったら同じクラスの人に挨拶をしてみてはどうでしょうか？
それと、笑顔です！！海兎君はいつもブスッとしているからみんなから怖がられるんですよ！だから、学校に行ったら笑顔で々クラスの人に挨拶をする！！それで、プリントなどが配られた時には『ありがとう』と言う！！！多分これを毎日していたら、みんな仲良くしてくれますよ！！」

少し、イヤそうな顔もしたが今の状況ではいけないと思ったのかスグに表情を綻ばせて
「オウ！！！でも、さすがに俺一人だと寂しいから友哉も手伝ってくれ！！」
「もちろんです！！！さぁ、頑張りましょう！！！」

ふと、時計を見ると結構遅い時間になっていた。
「あぁ、もうこんな時間ですね…。あまり遅くまで家に帰らないと2人に心配をかけてしまうので、そろそろ帰りますね！では、また！！」

そして海兎君に見送ってもらい、中島邸を後にした。
その時はまだ、僕たちを見ていた影に気がつくことは出来なかった…

「あいつ、まだこんな世界でノウノウと生きていたのか。
ん？あの人間は…昔血を飲み干してしまったあの人間の子供だろう…。クックック…。これはまた楽しくなりそうだな…」

「うぅ～…さ、寒気が…。気のせいかなぁ。まぁ、今はもう冬だしねぇ…さぁ、早く家に帰ろうかな」

第四章　孤独（後書き）

お疲れ様でした！！！
最近台詞が長いですよねｗｗｗ
まぁ、お気にになさらず・・・
とにかく！！！！
この先の展開を考えながら、今から寝ます！！！ではみなさんオヤスミなさい！！！
あ！！一つ言い忘れてました。あのぉ、出来ればアドバイスとかをコメントみたいなので書いていただけたら嬉しいなぁ。と思っております！！！
でもでも、私結構傷つきやすいので・・・ｗｗｗ
オブラートに包んでコメントしてくれたら幸いでございます＞＜
でわでわ！！！

第五章　友達（前書き）

お久しぶりな気がしますｗｗｗｗ最近はあまりＰＣをしなかったのでｗｗｗｗ
どうしようかぁ～先が思い浮かばないｗｗｗｗ
スランプだぁぁぁぁぁぁｗｗあ、私にスランプも何も無いなぁｗｗｗｗ
もともとからダメダメだｗｗｗ
さぁ～せんｗｗｗついでにテンションがウザくてさぁ～せんｗｗｗｗ
と、とりあえず！！こんなテンションがくそウザイ私は無視して！！
続きをどうぞｗｗｗ

第五章　友達

「良いですか？笑顔ですよ！！！」
僕は海兎君を一緒に登校しながら一生懸命説明していた。
まぁ、海兎君がどのくらい聞いているかは微妙なところですが…
「海兎君！聞いてますか？では、ニコッとしてみてください。」
そういうと、スゴイしかめっ面をしたかと思うととても引きつりながら笑顔を作った
「ど、どうだぁ…こんな感じでいいか？」
……うわぁ～ほっぺがピクピクしてるじゃないですか…。
まだ、少し笑顔は早いでしょうか？まぁ、本人が笑顔だと思ってるならいいかな。
「そうですね、少し引きつってますが良いでしょう。本来ならこんな感じで笑うんですよ。」
僕がお手本を見せると
「おぉ～すげぇなぁ…。でも、俺は今の作ってる笑顔より話したりして笑ってる友哉の方が好きだなぁ…。」
そんな！！は、恥ずかしいことを…
「ん？どうした顔が赤いみてぇだけど…も、もしかして！！熱でもあるのか！？」
……相変わらず心配性で少し天然ですね。
「大丈夫ですよ。それより、教室まであと2，3mです！さぁ、行きますよ。」

ガラガラガラ
「おはようございまぁす。」
僕が最初に言うと
「お、おはよう…」

続いて海兎君も言ったが…
「海兎君！それじゃあいつもと変わりませんよ！さぁ笑顔です。え・が・お！」
僕がコソっと言うと、引きつった笑顔で
「お、おはよう」

と挨拶した。それが珍しかったのかクラスメートが集まってきた。
「多田が中島と一緒に居るなんて珍しいな。なにかあったのか？」
とクラスメートの一人が尋ねてきた。
「いいえ！僕と海兎君は親友なのです！！」
僕が自慢げに言うと、海兎君も
「おう！昨日初めて話たけどな！でも親友だぜ！！！」
と言い切って僕に見せるような笑顔をクラスメートに向けた。多分その笑顔は本物なのだろう、引きつっている雰囲気は無かった。

休み時間、僕と海兎君の周りには人が集まっていた。
「え、お前らそんなに仲良かったっけ？」

「いえ、昨日初めて声を聞いたくらい接点がなかったんですよ。」
僕が少し歯切れが悪そうに言うと、補足をするように
「俺なんか、友哉の名前知らなかったしなぁ。多分友哉も俺の名前知らなかったんじゃねぇか？」
そう海兎君が言って、皆が笑っていた。

翌日

相変わらず僕たちの周りには人がいっぱい居る。
海兎君も皆と仲良くなれたようだし…。少し寂しいけど、これで一安心かな。
あ、そういえば僕先生に呼ばれてたんだった…今日機嫌悪かったから遅れたらまた怒られるかも…
急がなきゃ。

「海兎君！僕、先生に呼ばれているので行ってきますね！すぐ帰ってくるので、待っててください！」

そう言って友哉は教室を出て行った。
そしてクラスメートの後藤？とか言う奴が
「多田偉いよなぁ…」
と呟くように言った。
「どういうことだ？」

そういうと、少し戸惑って口を開いた。
「もしかして聞いてないのか？あいつの両親死んでるんだぜ。」
「あぁ、それは知ってる。父親の弟夫婦に預けられてるって。」

俺がそこまで言うと、しばらくの間、沈黙が続いた。そして後藤が
「そこまで知ってるなら、なんで言わなかったんだろうな…。
俺が言って良いのかわかんねぇけど…。聞いて驚くなよ？」

あぁ、もうイライラするな！
「大丈夫だ！早く教えてくれ！！」
俺がせかすように言うと渋々
「俺が言ったって事は内緒だぜ？

実はな、アイツの両親吸血鬼にやられたんじゃねぇかって…
二人とも首元以外傷は無かったみたいだし…それに一番おかしいのが、その…。体中の血が一滴も無いって事なんだ…。多田はそのことを信じてないみたいだけど、警察ももう捜査のしようが無いってさ…
証拠も無けりゃ目撃者もいねぇし。だから、多田の前ではこの話と吸血鬼関連の話はしないようにしてるんだ。それでもあぁやって元気にだれにでも笑顔だろ？両親も友達も吸血鬼にやられてるのかもしれないのに…。」

…オイ嘘だろ…？俺が吸血鬼だって知っても、そんなこと一言も言ってなかった…
友達って、あの同級生のことだろうけど…そいつも吸血鬼に？
アイツは人間じゃない何かって言ってたから、てっきり動物とかかと思ってたのに…。
なんで俺には言ってくれなかったんだよ…。

「どうした？中島？」
後藤が俺の顔色を伺う。
笑顔笑顔！！

「あ？あぁ大丈夫だ！気にすんな！」

まぁ、後で友哉に聞いてみようか…。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ヤバイです！！！急がなきゃ！！！
よし！ラストスパートをかけますよぉぉぉぉぉ！！
全力疾走で走ってたら、廊下の角から人が出てきた。
「あわわわわわわ！！！！！」
止まろうとしたが、全力で走りすぎて止まれない。
ドンッ
「ドワッ！！」
「すすすすすす、すみません！！！大丈夫ですか！？」
僕が早口でそう尋ねると
「えぇ、僕は大丈夫。でも、君は…病院に行った方がいいかもしれないな…。額から血が沢山出てるぞ。」
「え？あぁ、このくらいなら大丈夫ですよ。いつものことです！あの…立てますか？」
僕は、少し痛む頭を抑えながら手を貸した。
「あぁ、すまない…。っ痛」
「だ、だい丈夫ですか！？ほ、保健室行きましょう！！！」
「せんせ～い…ってまた居ないんですかぁ？しかたないなぁ…もう。ひとまずベットに座ってくださいね。」

「あぁ、悪いな…えっと君は？」
「僕、多田友哉です！！君は？」
「僕は、岡竹（おかだけ）　博望（ひろみ）だよ。よろしく！」

ひろみさんは、背が高く、綺麗な金髪で目が海のように青かった。
海兎君とは違う美しさがありますねぇ～
…ん？ひ、ひろみ…！？もしかして僕女の方を怪我させてしまったのでしょうか！？
僕が不安な表情をしているのを勘付かれて、笑いながらこう言った
「アハハ大丈夫僕は女じゃないよ！安心して。少し分かりにくい名前だよね！！」
え？なんだぁ～安心しました！！
そんな他愛も無いことを話していると、保健室のドアがガラガラと開いて白衣を着崩してたばこを咥えた神田（かんだ）　健（けん）が現れた。

「もう先生！何処行ってたんですか！？しかも、校内は禁煙ですよ！」
僕が注意すると
「あぁ？良いじゃんよぉ～。って、また怪我したのか友哉ぁ…しかたねぇなぁ…輸血するからこっち来い！…？そっちのは？もしかして…友哉！お前なぁ…怪我するのは勝手だが、他人は巻き込むなってあんなに言っただろ！！」

「そんな！！！それでも保健医ですか！？あなたって人は…まったく…そんなんだから奥さんに逃げられるんですよ！！バカなんですか？アホですか？少しは学習したらどうですか！？」
僕と健先生の話を聞いていた博望君が
「アハハハハ！！面白いなぁ…。あぁ、あのでもそんな言い合いする前に、僕の怪我をみてはくれないんですか？」

笑いを堪えながら、博望君は言った。

「あぁ、わりぃわりぃ。ちょっと待ってろぉ～ここ痛むかぁ？痛いかぁ…じゃあここは？ここは痛くないと…。ＯＫ！分かった。捻挫かなんかだな。まぁ、そこまでヤバイ怪我じゃねぇから大丈夫だろうけど、一応家に帰ったら病院行けよ！
んで、友哉お前に宿題だ！
今日から、こいつの世話係な！」

世話係！？なんでですか！？
「なんで世話係になるんですか？」
そういうと、健先生はため息をついて
「お前なぁ、誰のせいでこいつが怪我したと思ってるんだ？お前だろ？それに、今思い出したんだけどよ、こいつは転校生だろ？ホントは明日来るはずなんだが…まぁそこら辺は俺にとっちゃどうでもいいがな。という事で！まだ、この学校に慣れてない転校生君にこの学校のことをおしえてやれ！！これは宿題だからな！！ちゃんと宿題しねぇと、お前の評価こっそり下げるぞぉ～」

な、なぜ！？そんなの脅しですよ！まぁ、僕は評価を下げられても構いませんけど！
でも、僕のせいで博望君が怪我をしてしまったのは確かだし…それに転校生だったんですかぁ…。
転校早々、こんな目に遭わせてしまってしまって…申し訳ないです…。

「分かりました！では、僕が博望君及び、転校生のお世話係です！！もし、宿題をちゃんとできたらパフェ奢(おごって)って下さいね！！」

「ヘイヘイ分かったよ。仕方ねぇ。じゃ、転校生。君も確か3組だ

ろ？分からないことがあったらコイツに聞け。困った時もこいつを頼れ！
よし、友哉。輸血終わったぞ。
じゃあ、解散！！！さっさと帰れよぉ～下校時間とっくに過ぎてるからなぁ～」

そんな！早く言ってくださいよ…もう…
とりあえず、海兎君にメールしよう！んで、先に帰ってて貰わないと…海兎君何も悪い事してないのに
先生から「早く帰れぇ」って怒鳴られちゃいます！

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【ピロリ～ンピロリ～ン。メールだよぉんメールだよぉん早く返信しないと怒るかもぉ】

ん？メールか…。お！友哉からじゃん！ったく、長い事待たせやがって…。なんだなんだ？

『スイマセン！海兎君！先に帰っててください！！
実は僕、今さっき転校生にぶつかっちゃって、足を怪我させちゃったんです…。
それで、保健の先生にお世話係りに任命されちゃったようですので…。
なので、当分の間は転校生と一緒に居ないといけませんので…。
クラスメートと仲良くしてください！！本当にスイマセン（涙）』

…なんだよ。
それなら最初からメールしろよ…しかたねぇけど…
アイツのドジにはホント驚かされるな…
しかたねぇ…一人で帰ろう。…ん？あれは、友哉か。アイツも頭に

包帯巻いてるじゃねぇか…。
あれ？あの隣にいるのが転校生だよな…でも、アイツは…。ま、まさかな！アイツってあんまり、人間界(こっち)が好きな奴じゃねぇもんな！
おう、気のせいだ気のせい！

まさか…。岡竹じゃねぇよ！！！アイツは人間界(こっち)に来れねぇもんな。
最近、岡竹(アイツ)の夢みるからだな…
アハハ…疲れてるんだろう…。

さ、帰ろう帰ろう…。変な事を思い出す前に…

第五章　友達（後書き）

お疲れ様です！！！！いやぁ、読みにくいですよねｗｗｗすませんｗｗｗ

さぁ！！新キャラ２人登場です！！！！

本当のこと言うと、後２日で書き上げる予定だったのですが…書き上げる予定であんなタイトルにしたんですけどねぇ・・・。

まぁ、気にせずに行きましょう！！！！

さて…この２人…後々友哉と絡むと思います！！そうなるように頑張って話し繋げますので！！！この先も宜しくお願いします┐〇ペコ

第六章　記憶（前書き）

えぇっと・・・・ハイwww今日は聖なる夜ですwwwwwww
まだ、何も始まってない！！！くっそぉぉぉぉぉ！！！私のバカぁぁぁぁぁぁぁぁぁwww
スイマセン・・・本当にすみません┐◯ペコ
せっかく季節感タップリの題名にしたのになぁ・・・
私の能力の低さに絶望したぁぁぁぁぁぁぁぁぁ└┘└┘◯ガックリ・・・
あ、ついでに…
語り手がコロコロ変わって読みにくかったと思います＞＜
スイマセン…でも、そうしないと私の技術力では話を進めることが出来なかったのですＴＡＴ
今回ももしかしたらそうなるかもしれませんが…勘弁してください

第六章　記憶

俺は家に帰ってベットの上に寝転がった。
あれは…何年前だっただろうか…。岡竹の…岡竹博望の本当の姿を知ったのは…

岡竹は俺と同い年のくせにリーダーシップがあったし、こんな俺にも優しくしてくれたから俺は『ひろ兄』と呼んで慕っていた。
それに、ひろ兄は、俺の家の近所だったからよく一緒に遊んでいた。

「ひろ兄！！見て見て！！バッタ捕まえたよ！！！」

「おぉ！最近は虫も怖くなくなったんだな。さすが海兎だな！」
そう言ってニコッっと笑ってくれていた。

その数日後

「ひろ兄～、最近ねお父さんが忙しそうに家の中を歩き回ってるんだけど、なんでかなぁ？」
俺がそう言った時、本当は分かってたんだ…俺が日本界（こっち）に修行に行くって事を…。
でもひろ兄は

「海兎が何か悪いことしたから、学校の先生に怒られたんじゃないかな？海兎はいつも遊びが過激だからね。」
って笑顔で言ってくれた。
そんな優しいひろ兄が…あんなことするなんて思ってなかった。今でも信じられない…。

その日はいつもと同じように俺たちの秘密基地で遊んでいた。
いきなりひろ兄が
「なぁ、海兎この間すっごい空き家を見つけたんだけどさ、明日行ってみない？この秘密基地をまっすぐ行ったところにあるんだ！！」
と言い出した。
その時俺は行くのを躊躇(ためらう)うべきだったんだ…。まぁ、いまさら後悔しても遅いけど…

翌日
ひろ兄は結構な大荷物で俺の家に迎えに来た。ちょうどその日はお父さんが仕事に出かけてたから俺一人だけだった。

「ひろ兄なんでそんなに大きい荷物持ってるの？中何が入ってるの？？」

俺が質問攻めしていると、いつものような笑顔で
「ん？これはね、森を歩いてる途中で海兎が怖い動物に襲われても助けられるようにだよ。僕が守ってあげるから安心してね」
と言った。今思い返すと、その時に浮かべていた笑顔は少し冷たかったかもしれない。幼かった俺にはまだそんなことは分からずに簡単にアイツの話を信じていた。

そして、いつものように秘密基地まで行きひろ兄に手を引かれその奥に進んで行った。
すると、西洋に建てられたお城みたいな家が建っていた。

「わぁ…おっきい！！！ねぇねぇ！中入っても良いかな？？」

「良いんじゃないかなぁ？誰も住んでないみたいだし…」

そういい終え無いうちに俺はその家に入っていった。
誰も住んでないのに綺麗なままの机やイスが几帳面に並べられていた。
シャンデリアもピカピカだった。

「すっげぇ〜…」
と俺が呟くとひろ兄が手を引っ張って
「二階に行ってみよう！！もしかしたら何か良いものを見つけられるかもしれない！！」

そう言った。その時、俺の直感は言っていた『ソイツの言う通りにしていたら身を滅ぼす』と…
でも、俺は気にせずにひろ兄の後をついて行った。

一部屋覗いてみると、とっても大きなベットが置かれていた。お姫様が寝るようなカーテンらしい物が垂れているベットが。

「うおぉぉぉぉ！！！すっげぇ！！でかいなぁ〜！！」
そう言って、ベットにダイブした。
そして、枕に顔を埋めていたら、手を何かに縛られた。紐のような柔らかいものでは無い…ゴツゴツしててヒンヤリとした鉄製の何か…。

俺が驚いて手元を見ると、いかつい鎖が俺の手に巻き付いていた。

「な、なにこれ…？」
まだ状況が把握できてない俺にひろ兄が
「あれ？まだ分からない？まぁ、そのウチ分かるよ…」

そういうと、ひろ兄が持っていた大きい荷物の中からいろんなものを出してきた。

「じつはもっと持って来たかったんだけどね…そうすると重すぎて歩くのが大変だからね。だから、これで我慢してね」

そう言って、長い紐を出した。よく見るとそれは鞭だった…。

「え！？ひろ兄？なにする気？それって俺を守るために持ってきてくれたんだよね！？」

俺が必死に抗議すると

「あれれ？僕の言ったこと全部信じちゃった？ごめんねぇ～海兎を守るって言うより、俺が楽しむために持ってきたものなんだよねぇ～」

そういうといつもの笑顔とはかけ離れた不気味な笑顔でこう言った。

「さぁ、始めようか…」

パチン　バシッ

かれこれ何分こんなことをされているのだろう…。

鞭で体を叩かれ、出てきた血をひろ兄が舐め取る…。

最初のうちは抵抗していた俺も、何分もこんなことをされていると抵抗する元気もなくなってしまう…

「ひろ兄…もうこんなことやめようよ…なんで吸血鬼が吸血鬼の血

を吸わないといけないの？
こんなことしたって、何も良いこと無いよぉ…」
俺が必死に搾り出した声で言うと、ひろ兄は顔色一つ変えず
「別に血が吸いたくて、こんな事してるわけじゃないよ。そうだなぁ～あえて言うなら…僕が海兎を虐めたくなったから…。かな」
そういってまた不気味な笑顔で笑った。
あぁ…もうだめかも…ちょっと意識が…
そう思っていたら
「そこで何してんの～？」
けだるそうな声がドアのほうから聞こえた。
「いやぁ～別にさ、お互いが楽しんでやってるなら俺は何もいわねぇよ？俺には関係ねぇし。
でも、どう見たってそっちの人嫌がってるんじゃねぇの？つか、もう意識飛びそうな目してるし」
逆光で見えなかったが、その人はとても凛々しく見えた。
それから、目を覚ました時は自分の家のベットの中だった。

服も綺麗で、傷跡も無い…なんだ。夢か…と思っていたら

「いやぁ～俺がちょうどあそこの家に探検しに行って良かったなぁ。感謝しろよ？
とりあえず、治療はしといたから。じゃあ、安静にしてろよ」

そういってまともに顔を見せないで俺の家から居なくなった。

「…はぁ、いやな事思い出しちまった…あのおっさんは一体何処のどいつなんだろう…？まぁ、良いや…風呂にでも入ってさっぱりしようっと」

岡竹なハズない確証が欲しいなら、明日学校に行って自分の目で確かめれば良い。
よし、そうしよう！！！さぁ～てさっさと風呂はいんねぇとな…さみぃさみぃ。

第六章　記憶（後書き）

お疲れ様です（╹∇╹＊）（╹◇・：；・・：・・・　　（╹・：；・・・・

・：；・・：・　　・：・：・：；・・

今回は海兎君が語りてですね～

いやぁ～ちょっとノリだったので心配な文構成ですが…

まぁ、気にしないで下さい！！でわ！！！

もうクリスマス終わっちゃいましたが！！

話は続きます！！！

第七章　岡竹博望（前書き）

オヒサ！！ではないような？ｗｗｗいつもこんなだらしない前書きですいませんｗｗ
さて！！今回の語り手は、友哉君にお任せいたします！！！
最近友哉君のキャラが適当になってしまっているｗｗｗ
あ、皆さんお気づきだと思いますが友哉君も海兎君も博望君も健先生も実在しますｗｗｗ
私の親戚の皆さんですｗｗ
とりあえず、「小説に出させて！」っと少し濁して頼んだら
「おｋ！」
とのことでしたのでｗｗｗ
友哉君の口調はあんな感じではないですが、メガネッ子ですｗｗｗ
海兎君は・・・そのまんま？だと思いますｗｗｗ
ま、まぁ・・・
小説の続きをどうぞ＞＜

第七章　岡竹博望

今日は、海兎君に申し訳ないことをしてしまいました…。
でも僕博望君のお世話係だし…

あ！明日何時に迎えに行けば良いか聞かないと！
一応、博望君の携帯の電話番号とか入ってるし…電話してみよう。

あぁ緊張するなぁ！！よ、よし！！
『プルルルルルル　プルルルルルル』

『ガチャ　ハイもしもし博望です。友哉君でしょ？どうしたのこんな時間に…ってまだ８時だけど』

「あ、あの！明日何時に迎えに行けば良いですか？やっぱり足が痛いと思うので、少し時間に余裕を持って行ったほうが良いと思いますが。」
僕が少し早口で言うと、ちょっと悩んで

『学校まで大体歩いて１０分だったよね？それで少し聞きたい事があるんだけど、何時までにいかないと遅刻になる？それによって時間が変わるから。』

えぇと…僕遅刻なんてしたことないから良くわかんないけど、確か８時２０分までに行かないと遅刻になるんですよね…？

「多分８時２０分までに行けば遅刻にはならないと思います。どうしますか？」
電話口から、博望君が悩んでる声が聞こえる。

『そうだなぁ…7時５０分ってどうかな？少し微妙な時間だけど…良いかな？』

７時５０分だったら、僕は家を７時４０分に出れば良いですかね。博望君の家は通学路の途中にあるし…

「でわ、７時５０分に博望君の家に迎えに行きますので、準備しておいてください。他に何か聞きたいこととかありますか？」

すると、博望君は意外な事を言い出した。

『う～ん…あのさぁ、なんか君付けって僕苦手なんだわ…いや！君付けするなって言ってるわけじゃないんだ！でもさ、ねぇ…せっかく同じクラスで押せw係とかになったんだからさ呼び捨てにしたいなぁ～って思ったんだけど…ダメかなぁ？』

…う～ん呼び捨てかぁ～…僕呼び捨てなんて最近全然してないからなぁ～

でも、せっかく博望君が言ってくれてるんだし…まぁ、いいかなぁ。

「えぇ、別に僕は構いませんよ。」

『ホント？良かったぁ…じゃあ、よろしく！友哉！』

「はい宜しくお願いしますね！博望君！じゃなかった…博望！」

…なんか、変な感じです…

うん…違和感一杯！！

でもなんか青春って感じだぁぁ！！！

あ…青春も良いけど…

僕海兎君のことは呼び捨てじゃないんですよねぇ…

う～む…実のところ僕は海兎君と仲良くしたいのですぅ…

はっ！こ、これは…三角関係とやらですか！？
……分かってますって…
なんでそんな発想になるんですかねぇ～
三角関係なんてなるはず無いじゃないですか…まぁ、平和が一番ですけどね。

とりあえず、明日は7時５０分に博望のお迎え。
だから…7時４０分に家を出る！という感じかな。
さぁ～て寝ようかなぁ…明日はいつもより早いんだし…
あ、そうだ目覚まし時計の設定を早くしておかないと…
…これでよし！っと
さて、寝よう寝よう
僕はこのとき「三角関係なんて無い」と思っていたけど…
まさか…本当に三角関係になるなんて…。

第七章　岡竹博望（後書き）

ハイ！第七章終了！！
あ、ちなみに博望君のキャラはあのまんまですねｗｗｗ僕ッ子なんですよ！珍しいでしょ！！！！ｗｗｗ
健さんは～そうですねぇ～私たちより少し年上で大学生です（†・、ω・）ｂ
でも、こんなにだらしなくはないですよ！！むしろしっかりしてて良い人です＞＜
こんなカミングアウトしても大丈夫なのか…でも、男の人はＢＬは苦手って良く聞きますから大丈夫だと思いますがｗｗｗ
さて、今回は少し短かったかなぁ？でも、次の章も今日中に出来たら投稿したいと思っていますので！！しばしのお待ちを！！！！
あ、もし今日中に投稿できなくても怒らないで下さいねｗｗｗ

第八章　関係（前書き）

ハイ！ちゃんと今日中に投稿できそうですよぉぉぉ＞＜
さて…これからさきどうしようか…
私は雰囲気とその日のテンションで話を考えます！
私は雰囲気とその日のテンションで話を考えます！！
私は雰囲気をその日のテンションで話を考えます！！！！！！
大事な事なので3回いいました。
いやぁ～実際ホントにテンションで考えてるんですおぉｗｗｗ
学校の授業中とかｗｗｗお風呂に入ってる時とか寝る前とかｗｗｗ
まぁ、良い感じの話にならないんですよねぇ～
どうしてもRシーン突入！！！って感じの雰囲気になってしまうんですｗｗｗｗ
まぁ、Rシーンが嫌いなわけではないんですよぉ～ｗｗｗ
でも…あのぉ～喘ぎ声って言うんですか？あれを考えるのが恥ずかしくて／／／
ですが・・・まぁ、話がすすんでいくとRシーンに自然と入っていく雰囲気の話がいつかは出来るとおもうので～その時にでも書こうかなｗｗｗ
その時まで、しばしの間こんなくだらないお話でも読んで暇を潰して下さいまし・・・┐〇ペコ

第八章　関係

ピピピピピピピピピピピピ……

うぅ…もう朝ですか…さて起きないと。

「でわ、行ってきます！！」

「はい。気をつけて行ってらっしゃい。」

「気をつけるのよ！友君はすぐ怪我するんだから！」

おじさんとおばさんの心遣いが嬉しいです！

「ハイ気をつけて行ってきます！！！」

えっと…ここら辺だったよなぁ～

……あった！！

ピ～ンポ～ン

『ハイ。どちら様でしょうか』

「あ、僕多田友哉です！！博望君いますか？」

『あ、なんだ友哉か。それより！もう…呼び捨てで良いって言ったじゃん。』

あ、そうでした

「そうでしたね…スイマセン…」

僕が少ししょんばりして謝ると博望は笑って

『そんな気にするなよぉ！！冗談だって！！ったく…友哉ってからかいがいがあるわ。』

え？怒ったのかと思って謝ったのに…

「と、とりあえず！！！あの、急がないと遅刻しますよ！！」
『大丈夫でしょ。だってまだ7時４５分だし』
あれ？僕の家から5分しか掛からなかったっけ？まぁいいや…
学校に行って日直をお手伝いしたい気分ですので急いで行きたいのですが…
「と、とにかく！！博望は職員室に行かないといけないんだし！！早く行きましょ！！」

『ハイハイ。そんなにムキにならなくても良いのに…ホントからかうと楽しい奴だ』

それから、少しづつ話をしていたら学校に着いた。
そういえば…今日はまだ海兎君の顔見てないです…
って、まだ今日は始まったばっかりだから仕方が無いかなぁ。

「でわ！博望、職員室に行ってらっしゃい！！僕たちのクラスになると思いますから…待ってますね！」
「うん。ホントのこと言うと職員室の空気って苦手なんだよなぁ～僕…先生達がしかめっ面してそうで…」

博望…なんか小学生みたいです…以外と可愛いところもあるんですね。
そう思ってついクスッっと笑ってしまうと
「な！なんで今笑ったの？僕の話の中に笑う要素なんて一つもないんだけど！！」
「ハイすいませんでした。」
僕がすこしふざけたように謝ると

「と、とにかく…行ってくるよ」

そう言って職員室のドアを勢い良く開けて入っていった。
なんか、初対面の時を雰囲気変わったなぁ…まぁ良いか…。

さて！僕のクラスに行けば海兎君にも会えるし…急がなきゃ！！

「おはようございまぁぁぁぁす！！！！」

そういって、急いで自分の席に着き隣の海兎君の席を見た。
やっぱり、いつも学校に来るのは早かったからなぁ～

「海兎君！おはようございます！！」
「おう。おはよう」
あれ？なんか、今日機嫌悪い？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊

友哉はいつもみたいに俺に挨拶してきた…でも、どうしても昨日の後藤とかから聞いた話が頭をよぎる…。
アイツは吸血鬼が嫌いなはずなのに…とか…
それに…もしかしたら岡竹が人間界(こっち)に来てるかもしれないし…
なんか色々考えないといけねぇことがたくさんありすぎて困る…。

考えごとをしてたからかもしれないが、友哉の挨拶も素っ気無く返してしまった。
チラッっと友哉の方を見ると……
ゲッ！！！な、な、泣きそう！？
なんで！？どこら辺で泣くところがあったんだ！？
もしかして俺か？俺が素っ気無いからか！？

「どどどど、どうしたんだよ！！」
「な、なんでもないですっ！！」
なんでもないって言ってもなぁ…グズグズ鼻水垂らして…しかたねぇな…

「ほら、ティッシュ貸してやるよ。鼻拭けよ…鼻水垂らすなんてみっともねぇぞ」
そう言って俺が向こうの世界から持ってきた使っても減らないなどの結構便利なティッシュを貸すと

「あ、ありがとうございます！いやぁ～どうも最近風邪気味っぽくて…それに僕少し埃とかにアレルギーがあるみたいで…面目ないです…」

は？風邪気味？アレルギー？…なんなんだよ！！！！ったく…心配してそんしたわ！！！

「ありがとうございます。あれ？どうかしましたか？」
「なんでもねぇよ！そのティッシュお前にやるよ！！お守りにでも持ってろ！！！」

アホらしいな…もう良い…俺はもう何も考えないぞ！！！

ったく…どいつもこいつも…

あ、先生入って来たし…
「えぇ～皆さんおはようございます！今日はぁ、皆さんに転校生の紹介をしたいと思います。入ってきて」

ん？転校生？
あぁ、昨日友哉が言ってた奴か。って俺のクラスかよ…

入って来た転校生は…

岡竹博望…俺の大っっっっっ嫌いな奴だった…

第八章　関係（後書き）

さぁぁぁぁぁせん！！書いてるうちに日にち変わっちゃったｗｗｗ
そんでもってもう一つさぁぁぁぁせん！！
前の小説で
「押すｗ係り」ってのがあったと思います！あれは
「お世話係」です！！なんかもう…いろいろごめんなさい！！！
編集は・・・しませんｗｗｗｗｗ

第九章　約束（前書き）

こんばんわぁ～
お正月に私は一体何をしてるんでしょうねｗｗｗ
まぁ、いいですｗｗｗ
さて…あの題名にしてからというもの、「あれ？スリスマスってなんだっけ？」とか考えてしまうようになってしまいましたｗｗｗ
前にも言った通り、本当は１２月２５日には完成させるつもりだったんですけど…
なんか、結構深いところまで行ってしまって…こんなにダラダラと書いておりますｗｗｗまぁ、こんな意味不明で呼んでてイライラするような小説だと思いますが、何卒宜しくお願いします┐◯ぺコあ、遅くなりましたが
新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします！！

第九章　約束

う、嘘だろ…？

「えぇ～入って来てもらった転校生は岡竹博望君と言います」
そう言って担任は黒板に丁寧な字で岡竹の名前を書き始めた。
「では、岡竹君自己紹介してもらって良いかな？私はどうもこういう説明は苦手でなぁ…」

「あ、ハイ分かりました。
えっと、僕の舐めは岡竹博望です。髪の毛と目の色は生まれつきです。今両親は海外に居ます。
つい最近日本に来たばかりなので、文化の違いなど分からないこともあると思いますがそこは教えていただけると幸いです。えぇっと…よ、宜しくお願いします！」

そういって岡竹は頭を下げた。
オイオイ…お前そんなキャラじゃなかっただろ！
なんだよ！両親は海外！？いやいや！！人間界でもねぇし！！そりゃぁ分kあの違いはたくさんあるでしょうねぇ～人間(こっち)界じゃ人の血なんて吸わねぇしよ！！

と、俺が心の中で突っ込んでいると岡竹と目があった。
ニヤッっと笑ってすぐにまたいつもの営業スマイルに戻した。
相変わらず不気味な笑い方するよな…

「転校生の紹介は以上ですが、保健室の先生神田健先生からメッセージが来ています。」
『えぇ、転校生よくこんな学校に来たなぁ。先に言っておくと、こ

の学校は退屈だぞ。
ま、先生が何言ってんだって思われるからもう何も言わねぇけど…。
俺には関係ねぇし～。

さて本題に入るぞ。転校生のお世話係を多田友哉君に任命します。
まぁ、理由はいろいろあるんだけどなぁ～それは言わないでおくよ。
友哉もその方がいいだろ？

転校生よ、分からんことがあったらなんでも友哉に聞けよ。何でも良いからな。

あ、ちなみに言っとくけど、転校生足怪我してるからそこら辺考慮して付き合ってやれ

以上！保健室の天使神田健でしたぁ～　『

「だそうです。そういうことなので、皆さん友哉君や岡竹君が困っていると思ったら助けてあげてください！岡竹君の席ですが…やっぱりお世話係の近くの方が良いでしょうから…。中島君、席を一つ前に変わってくれますか？」

ゲッ…最悪…
でもここで断ったらアレだよなぁ～…ギャルゲーとかでいう好感度ダウンって奴だろ？
…仕方ねぇ…

「別に良いですよ。」

「スイマセン。では岡竹君、君はあそこの席です。それではホームルームを終わります！」

休み時間、俺は友哉と岡竹の会話を少〜し盗み聞きしていた。

「なぁ、友哉。俺まだ教科書持って無いから見せて！」

「良いですよ。まだ博望の教科書来てないんですか？教科書が来るまで僕の見て良いですよ」

「サンキュー」

…オッイー！！！

なんか俺の知らないところであいつら仲良くなってるぞ！！！

お互いに呼び捨てって…俺なんかまだ友哉に呼び捨てで呼ばれたことねぇのに…

ウゼェ…

なんか、友哉も友哉だよ…なんだよ！！もう知らねぇからな！！！

とか、気色の悪いことを心の中で呟いていた。すると、後藤が

「俺あの転校生苦手だわ…」

といきなり言い出した。

「なんで？良い人そうじゃん。いっつも笑顔だしさ。」

心にも無いことを言ったが後藤はそんなこと気にもせず続けた

「いや、その笑顔が嫌いなんだよ！なんかアイツの笑顔って全部作り物みたい…俺一番前の席で転校生に一番近かったんだけど、一回だけすっげぇ不気味な笑顔作ってたんだよ…。

いやぁ、友哉みたいにさつらい事があって仕方なく作ってる笑いとあの転校生の笑いって根本的に違う気がするんだ。なんかつくり笑いについてこんなに語られるとウザイかもしれねけど、聞いてくれ。

なんか、転校生のつくり笑いって

『自分はいつも笑顔で良い人だからみんな警戒しなくていいんだよ。良い人だから自分に興味を持て』

みたいな感じがするようなきがする…。
なんか俺変かなぁ？」
…後藤よ…俺はお前を始めてスゲェと思ったよ！！！！
大正解だぜ！！！つか良くあの一回だけの不気味な笑いに気づいたな…
尊敬するわ…しかも友哉のつくり笑いも見破ってたのか…恐ろしい奴！！
ま、とりあえずここは学校だからそんなことは言えないし。まぁ適当にカバーしとけば良いかなぁ～
「まぁ、後藤が装思うんならそれで良いんじゃね？他人のことどう思うとかはその人次第だからな。」
おぉ！良いこと言ったぞ俺！！
「そうか…じゃあ良いや！ありがとなこんなくだらん事聞いてくれて！！」
なんて単純な奴なんだ…まぁ、それも良いところに入るのだろうな

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

博望は僕の席の隣になった。
海兎君が違う席になったのはショックですが…でも僕は博望のお世話係ですもんね…仕方が無いです…。
「なぁ、友哉は部活って何入ってんの？」
「サッカー部ですよ。あれ？言いませんでしたっけ？」

「うん初耳。そっかぁ～サッカー部かぁ…」
博望…部活に入りたいんでしょうか？
「博望は何部に入るんですか？」
僕がそういうと、博望は少しがっかりした顔でこう言った
「いや、僕は部活入らないんだぁ。家の仕事が忙しいからねぇ」
あぁ、そっか両親は海外に居るんだっけ。家事ですか…大変ですねぇ…

「あ！なんなら僕もお手伝いに行きましょうか？どうせこれから何週間かは部活休みだし！」

「え？良いよ～そんなぁ…」
「大丈夫です！！それに足も怪我してたらやりにくい家事もあるでしょうし！！！！是非お手伝いさせていただきたいです！！」
僕が熱心にそういうと、根負けしたのか博望が
「仕方ないなぁ…僕ん家汚いから！！！それでも良いんだな！？」
「良いですよ！！僕が掃除してあげますよ！！！」
少し喧嘩口調で言うと、博望は笑って
「分かった分かった！！僕の負けだ…あぁ面白ぇ…じゃあどうする？いつ僕ん家来る？」
「え？これから毎日放課後行きますよ」
「え！？毎日？いや僕は良いけど家族が心配するよ…？」
おじさんとおばさんは連絡入れたらだいじょうぶかな
「大丈夫です！！連絡したら理解していただけると思います！！」

「そ、そうか…わかったじゃあ、宜しくなぁ～！」
「じゃあ約束ですよ！！毎日家事をしに行きますからね！」
「おう！男の約束は絶対だ！！！

このとき、『約束』なんていわなければ良かったのに…

第九章　約束（後書き）

ハァ～イ…
もうなんも書くことないっすｗｗｗｗ
誤字あると思いますが、見直ししてる時間がないので無視無視！！
誤字があっても編集して直しません！！全ぇぇぇぇぇ部無視無視！！
じゃ、次のお話で
グッバイ　ノシ

第十章　亀裂（前書き）

どうもｗｗｗ
前のは散々誤字がありましたねｗｗｗ博望が「僕の名前は」って言うところで
「僕の舐めは」ってなってましたねｗｗｗｗ
舐めってなんやねん！！
何を舐めるんや！！！も、もしかして友哉の【自主規制】かぁ！？
いやぁそれでも良いよｗｗｗもうそれでもおｋすぎるよ＞＜
しかも、この前書きの「クリスマスって何？」ってところを「スリスマスって何？」って…スリスマスってはじめて聞いたわｗｗｗｗ
どうしたらこんなうち間違いをするんだｗｗｗｗまぁそれはおいといて…
さんざん誤字があるこの小説ですが、結構なところまで行きましたよね？？
私の中でじゃ結構なところまで行ってます！！
という事で！！ここら辺でＲシーンを・・・と思います！！
この章でいけなくても次のしょうでは絶対Ｒシーン行ってると思いますので！！
頑張って暗号を解読してください┐○ペコ
でわ！あとがきで会いましょうｗｗｗ

第十章　亀裂

もちろんその日も僕は博望と帰った。
今日の授業中、僕が先生に当てられてイスから立ったら滑ってコケた事とか…。
博望が僕と間違えてよく知らない人に話しかけてたり…などお互いの失敗談などを話しながら。
すると
ピピピピピピピ　　ピピピピピピピピ
「あ、電話だ。スイマセン、ちょっと出ますね」
「あぁ良いよ。僕は気にせずにゆっくり話しな」

電話の相手は海兎君だった。
「はいもしもし。海兎君どうしましたか？」
電話から聞こえる声はとても暗かった。

『あぁ、もしもし？よく俺って分かったなぁ。』
「えぇ、画面に名前出ますしねぇ。それでどうしたんですか？海兎君が電話なんて珍しいじゃないですか。何かありましたか？」
僕が聞くと少し間を置いてこう言った。
『あのさぁ…ちょっと相談があるんだ。だからさ今日俺の家に来てくれないか？いきなりで悪いんだけど…。』
「良いですよ。じゃあ夕飯食べてから行きますね。何か持って行くものありますか？」
『いやぁ、特に無いわ。適当に持ってくれば良いよ。じゃぁ…それだけだ。わりぃなわざわざ電話なんかしちまって…』

「いえいえ。なんでも言ってって言ったのは僕ですから。気にしないで下さい。それでわ。さよなら」

どうしたんだろう…海兎君が相談なんて…なんかあったのかぁ？

「誰から電話だった？」

「え？あぁ、海兎君ですよ。」

「海兎君…僕のせいで席変えられちゃった人かぁ…あれは申し訳なかったなぁ…」

「大丈夫ですよ！海兎君は優しい人ですから！！」

すると、博望が僕の顔をじっと見てきた。

「ど、どうかしましたか？」

「いやぁ～随分とその海兎君のこと信頼してるんだなぁと思って。それに、その海兎君の話してる時すんごい笑顔だよなぁって。」

「そ、そうですか？まぁ、海兎君は僕の親友ですから！それに…」

「それに…？」

「大好きな人だからです！」

と僕が笑顔で言うと博望は顔を伏せて、そして僕に抱きついてきた。

「ど、どうしたんですか？」

「もう！！友哉可愛いぞ！！頬を染めてそんな事言うなんて…可愛すぎるぞ！！！」

そういって僕の頭をスゴイスピードで撫で回してきた

「ちょ、辞めてくださいよぉ～可愛くないですよ僕は！！そういう文化は日本にはありません！！」

博望は、名残惜しそうに僕からはなれた。

「もう、可愛いなぁ～本当に。あ、そろそろで僕ん家着くけど、手

伝いに来るのは明日からで良いよね？」
「あ、はい。でわ明日の放課後お手伝いしに行きますからね！！」
「はぁい。じゃぁまた明日！！」
「さよならぁ」

「ただいま帰ったです」
家に入るが誰も居ない。
あれ？なんで誰も居ないんだろう…
テーブルの上に置手紙があった
『ちょっとおばさんとおじさんは忘年会に行って来るよ。夕飯は作ってあるから温めて食べてください。どこかに出かける時はこの紙にでも書いてテーブルの上において行ってね。
おじさん&おばさん　より　』
忘年会かぁ…じゃぁ僕は適当にご飯食べていこうかな…。あ、紙に友達の家に行ってくるって書いておかないと…多分遅くなるから、遅くなるって言うのも書いておこうかな。

さて…ご飯も食べたし、行くか！！
さぁ着きました海兎君宅（豪邸）！！
相変わらず大きいなぁ…。あ、ピンポン押さないとね…
ピーーーーンポーーーーーン

『ハイ。どちら様ですか』
「あ！ぼ、僕多田友哉です！！」
『なんだぁ…友哉かぁ…。今から門開けるからそこのジェットにのって来て』
ジェット？あの小型ジェット機のことでしょうか？
門が開いたその目の前には立派な小型ジェット機が停まっていた。
「……これに乗れば良いんですよねぇ？ちょっと怖いけど…よし！！行くぞ！！」
そして大体１０分弱。豪邸の玄関の所までたどり着いた。
それを見計らったように海兎君が出てきた。
「大丈夫か？ジェット結構ゆれただろ？」
「は、ハイ大丈夫じゃないです…目の前がくらくらです」
僕がそういう海兎君は、少しあわてて毛布を掛けてくれた。
「と、とりあえず中入れよ！！お茶でも出すよ」
ふぅ…落ち着いた…いやぁやっぱり小型ジェット機は怖いですねぇ！！
あ、そんなのんきなこと言ってる場合じゃないですよね。
「ところで、海兎君相談ってなんですか？」
そういうと少し言いづらそうに口を開いた。
「その…。友哉の父さんと母さんって吸血鬼にやられたんだろ？同級生だったって言う友達も…」

…誰からそんな事を聞いたんでしょうか…多分後藤君あたりでしょうね。あの人は結構おしゃべりですから…

「いいえ、違いますよ。」

「じゃぁ、なんで証拠も目撃者もねぇんだよ！それに…体の血全部なかったんだろ…？そんなの人間には出来ねぇだろ…」

そんなことまで聞いてたのですか…。でも、僕がその事実を認めてしまってはいけませんよね…

「別に…僕は吸血鬼なんて信じてませんし…」

僕がそう言ったとたん海兎君の目つきが変わった。

「吸血鬼を信じてない？この前俺のこと吸血鬼って信じてなかったのかよ！！俺にあんなこと言っておいて…それで自分は吸血鬼信じてないなんてありえねぇだろ！！お前の言ってること矛盾してるよ！」

僕が顔を逸らすと

「ちゃんと俺の目を見て言えよ！！本当に吸血鬼信じてないのか！？」

「なんで何回も言わないといけないんですか？」

そう言い返したとき、海兎君に押し倒された。

「辞めてくださいよ！！離してください！！！」

僕は一生懸命暴れるが、海兎君の力にはかなわない。

そしてそのままキスをされた。

歯列を割って海兎君のしたが僕の口の中に入ってくる。

「ん…」

息が出来なくて苦しくてたまらない…そう思っていると海兎君の口が僕から離れた。

「お前に言う気が無いなら、力ずくで言わせてやるよ」

そう言って、また僕にキスをした。

第十章　亀裂（後書き）

時間も時間なのでそろそろストップｗｗｗ
さてぇそろそろＲシーンですよぉぉぉ＞＜

さて…なんかもうあとがき書くこと無いのでここら辺でｗｗｗ
誤字があっても気にせず解読して下さいｗｗｗｗ
でわ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3552p/

聖なる夜は君と二人で・・・・・

2011年10月7日02時39分発行